

---

# エチュード1：若いということ

なつき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エチユード1：若いということ

### 【Nコード】

N1939L

### 【作者名】

なつき

### 【あらすじ】

「あたしは閉塞した世界に生きていた。それはとつても明確に、嫌んなるくらい明確に分かる。あのときのあたしの世界って言えば、家と、中学校と、本屋と、CDショップと、それと由美香の家くらい。」

あたしは閉塞した世界に生きていた。それはとつても明確に、嫌になるくらい明確に分かる。あのときのあたしの世界って言えば、家と、中学校と、本屋と、CDショップと、それと由美香の家くらい。

そう、由美香。由美香はあたしの世界のなかに住む、あたし以外の唯一の人間だった。

確かにあたしの周りには色々な人がいた。クラスメイト、部活仲間、教師、家族……でも彼らはあたしと関係ないところで生きていた。あたしは賑やかな教室でひとりだった。あたしは彼らになんて興味なかったし、彼らだってあたしになんか興味なかっただろう。完全に、ゼロ。プラスもマイナスも何にもならない。

でも由美香は違った。由美香はあたしの世界に存在していた。ひっそり笑い、すうつと沈黙し、じつとりと怒り、そしてまた笑う。由美香は鮮やかに息づいていた。生きていた。

由美香は中学生なのに、色々なことを知っていた。ミュシャの絵やベートーベンの曲、ゲーテの言葉やトリュフォーの映画を、あたしは由美香から教わった。あたしの狭い世界は、その度僅かに、しかし確かに広がった。そして静かに絶望した。あたしは世界をぜんぜん知らない。それはファウスト的衝動って言うんだよ、由美香はもの知り顔でそう言った。

あたしは由美香を尊敬していたし、信頼していた。でもその反面、どろどろのどす黒い感情を抱いていたのもほんとうだ。

何だか不公平だと思った。不平等だと思った。あたしは空っぽだ。何にもない。なのに何故、同じ年であるはずの由美香のなかには、こんな色とりどりの世界が広がっているのだろう。あたしはこんなに、空っぽなのに。

「つて、中学の頃思ってた。本気で」

語り終わると、由美香は声を漏らして笑った。

「何だか私、大層な人みたい」

「みたいじゃなくて、大層な人だったのあたしにとっては」

あたしはふて腐れて、コーヒーをひとくち飲む。大学生になったあたしの世界は、ぐっと広がった。ただ憧れの対象だったはずの喫茶店なんかにも、こうして平気で出入りしている。

「じゃあ私も、告白しようかな」

由美香らしくない言葉だ、と驚き、何うように由美香を見る。由美香はガラス越しに往来の人々を眺めながら、すらすらと、リズムよく話し始めた。

「私のね、視野はとつても狭かった。何にも見えてなかったし、正直見ようともしてなかったよ。中学生って一番自己中心的だよね。

傲慢だし、自意識過剰もいいところ。あどけない顔しながら、とんでもないこと考えてたり。で、私もそのひとりだったよ。ほんとに私、現実と触れあうの拒否してたし、一生拒むつもりだった。でもそこに、さつきが現れた。

あの頃から、さつきは色んなこと知ってたよ。例えば音楽、色いろ知ってた。ビリー・ジョエルを、それで私は知ったよ。詩も私知らなかった。中原中也に萩原朔太郎。何でこんなの知ってんのって、ほんと思っただよ。ほんとに」

またしても、あたしは驚いた。それらのものはあたしにとってはあつて当たり前のもので、とくに意識せず日常に取り込んでいるものだったからだ。

だからあたしは言った。

「べつにそれは、好きだから、知ってただけ」

「だからつまり、そういうことなんだよ」

由美香はからかうような目をして微笑んだ。

そこであたしは、了解した。

「……ああ、なるほど」

「でしょ？ 私もそうなの、好きだから知ってただけ。当たり前すぎただけ」

由美香は一瞬沈黙して、視線をガラスの向こうにやっただまま呟くように言った。

私だつて、さつきに嫉妬してたよ。

それを聞いた途端、甘酸っぱいような、苦いような、何層にも重なった気もちになった。

「……何だか今の気もち、ミルクレープみたい」

「わかんないよ」

「何重にもなつてて、複雑」

「あー、でも、何となく、わかんなくないかも」

あたし達は小さく笑って、それぞれに思いを馳せた。あたしはコーヒーを、由美香は紅茶を飲みながら。

嫉妬しあつてたあたし達。狭い世界をぐるぐるしていた。一生抜け出せない、と信じてた。

そしてあたしはあっさりと抜け出して、ひとつぶん大人になった。きつとそれは、由美香も一緒。

でもあんなに息苦しくて、あんなに粘ついて、そしてあんなにもがいた季節、なかった。そしてそれは、きつともう二度と来ないのだろう。あたしはもう、色んなことを知ってしまった。常識だとか、客観視だとか、責任だとかを知った。もうあんな、一心不乱に暴れることはないのだろう。

そう思うとすこしだけ寂しい気がして、この心の動きがとつてもありふれていることに気がついて、何だかなあ、と苦笑した。

あたしはコーヒーを見下ろして言う。

「またベーターベン聴こうかなあ」

「いいよね、ベーターベン」

「うん」

あのときは、素直にいいと思えなかったけれど。

大人になるとは、つまり。考えかけて、止めた。そう簡単に規定

できるもんじゃなと思った。それにきつと、今のあたしだって充分に若いのだろう。

「あたし達いつたいいつまで、若気の至りをするんだろうね」

「一生じゃない？」

由美香は何ということなしに言い切った。そして由美香は続ける。

「一生、こつやつて、若かったなあって言いあつて、それで歳とつてくんだよ、きつと私たち」

「そうかもね」

それは不毛だけれど、究極的に幸福なことのように思えた。

だって、あたしには、「若かったなあ」って言いあう相手がいる。

そう思うともうあたしはすっかり安心してしまつて、あの頃は若かったね、と言つてみた。

「若かったよね」

若気の至りは一生つづく。それでいい。「若かったなあ」って苦笑混じりに言いあえればそれでいい。

あたしは、あたし達は、今が一番若いのだから。

(後書き)

固有名詞を並べてみたかったです……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1939/>

---

エピソード1：若いということ

2010年10月8日15時22分発行